

こども未来会議(第 14 回)議事録
7 月 3 日(木)11 時 00 分から 12 時 00 分まで

【山本部長】

はい。それでは、ただいまより 第 14 回こども未来会議を開会させていただきます。

本日はご多忙の中、ご参加いただきまして誠にありがとうございます。私、会議の事務局を担当しております、東京都子供政策連携室企画調整部長の山本と申します。本日の出席者につきまして、秋田座長と大谷委員よりご欠席の連絡を頂戴しております。

座長不在のため、本日の進行につきましては、こども未来会議設置要綱第 6 条に基づき、座長から田中子供政策連携室長に進行役を務めてほしいとのお話がありました。それでは田中室長、進行をお願いいたします。

【田中室長】

はい、田中です。

どうぞよろしくお願いいたします。本日はプレゼンターの方にご参加いただいておりますので、ご紹介させていただきます。一般財団法人ピースコミュニケーション財団代表理事ならびに早稲田大学グローバル科学知融合研究所副所長で研究員客員教授の一木広治様でございます。それでは開会に当たりまして、小池知事よりご挨拶をお願いいたします。

【小池知事】

皆様、おはようございます。本当に暑い毎日でございますが、今日はこども未来会議も第 14 回を迎えました。ご参加誠にありがとうございます。

今日のテーマでございますが、子どもが社会の一員として意見表明をするための機会、チャンスをついに創出していかでございませう。子どもは大人には思いつかないようなアイデアを持っていますよね。そして、その視点、発想から、むしろこちら、大人がハッと気づかされるようなことも多々あるかと思ひます。

都におきましては、そんな子どもたちの意見を聞きまして、子ども目線で政策のバージョンアップを行っていきたくと考えております。例えば、昨年度ですけれども、中高生から政策提案を受けまして、そして中高生と企業、団体とをマッチングをする職業体験のプラットフォームの事業を今年度予算に盛り込んだところでございませう。

参加した中高生の方から政策提案を受けた時に、「自らの意見を周囲に伝えることに自信がついた」と。やはりそういう機会を設けることによって、いろんな経験ができるということの証左かと思ひます。言うまでもありませんが、子供たちは次の時代の主役であります。

そんな子供たちの声に耳を傾けて、様々な施策を反映できますように、子供たちが意見を述べる、表明する機会を増やしていきたいと考えております。こうした場を作り出す取り組みをこれまでで作ってこられました今日のプレゼンター、ピースコミュニケーション財団の代表理事の一木浩司さんから、今日は様々な例をまたご提案をいただきたいと、このように思っております。

それについてお聞きして、また委員の皆様からご意見を伺えればと。大人の意見、子どもの目線でも結構でございますので、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

【田中室長】

知事ありがとうございます。本日のテーマは、子どもが社会の一員として意見表明するための機会の創出です。

まずは事務局の方から報告をお願いいたします。

【山本部長】

はい。それでは事務局から報告させていただきます。東京都では、様々な取組を通じて、子どもが社会の一員として自らの意見を表明するための機会を提供してございます。

まず、都の施策に関して子どもたちの意見を聞くため、年代別に公募したこども都庁モニター計1,200人からウェブ形式のアンケートに回答していただいています。また、子どもからの意見を都の施策の充実に活用していく取り組みとして、こどもワークショップを開催いたしました。

昨年度は、未来の東京、東京2025世界陸上、多摩都市モノレール延伸部のまちづくりの3つのテーマで実施をいたしました。ウェブアンケートとは異なり、対面でのグループワークのため、子どもが安心して率直に意見を言えるよう、ファシリテーターの配置など様々な工夫を凝らして実施しております。

こうして得た子どもたちからの様々な声や意見は、中高生に特化した都政とつながるウェブサイトの制作など、東京都の施策の充実に活用されております。次に、中高生政策決定参画プロジェクトでは、東京都の政策について子ども自らが議論し、都知事へ政策提案をいたしました。

議論するテーマは、中高生によるウェブ投票で決定してございます。公募により選ばれた都内の中高生12名が、半年間で10回のグループワークを行い、様々な議論を重ねて出来上がった事業案を知事へ提案しました。この提案は、2025年度予算に反映されております。

職業体験を希望する中高生と企業団体をマッチングする新たな仕組みとして既に事業が動き出しておりまして、今年の夏休みに中高生が様々な企業・団体の職業体験に参加する予定です。国内外の都市と子供政策での連携も進めてございます。

海外の子供政策先進都市に中高生を派遣しており、今年3月には10名がベルギーを訪問しております。渡航前の事前準備の後、現地で子どもたちとの意見交換や視察などから自分たちの意見を持ち、表明することの重要性を学びます。

また、国内外の子供政策先進都市の子どもたちを東京に招き、「こどもにやさしいまち」について考えるこどもシンポジウム”Teens Square”も実施しております。昨年度は、国内4都市の子どもたちが集まり、今年度は海外4都市の子どもたちを東京に招き、意見交換を行います。

こうした交流で意見表明の大切さを学んだ参加者が、その成果を還元する取り組みを進めます。事業参加後、一年間アンバサダーとして条例の普及啓発などに取り組みます。また、その後もアルムナイネットワークを通じて、都の様々な取り組みに継続的に参加していただき、子どもの意見表明の重要性の社会への浸透を図ります。

さらに、様々な環境下にある声を上げにくい子どもの声にも耳を傾けるため、子どもの居場所に足を運び、子どもの自由な意見や生の声の聞き取りも行っております。昨年度は、児童館や学童クラブなどに加え、こども食堂、児童養護施設などでも子どもたちに意見を聞いてございます。

また、都の職員が学校に出向き、様々な子供政策をテーマに授業を行う出前授業も実施してございます。学校という子どもにとって日常的な空間でストレスを感じることなく、自由に意見を言いやすくなることが期待できます。

昨年度は小中高の 1,000 名程度を対象に行い、今年度は特別支援学校での実施も予定してございます。こうした子どもたちの意見は、スマホ等からチャット形式で気軽に相談ができるギョッとチャットの立ち上げなど、様々な事業での参考となつてございます。

今後とも子どもたちの意見表明の場の充実とともに、意見を聞くだけでなく、受け止め、こども政策に反映させることを進めてまいります。報告は以上でございます。

【田中室長】

はい、ありがとうございました。それでは、プレゼンターによる発表に移りたいと思います。

一木様からプレゼンテーションをいただいた後に、意見交換等をさせていただきます。一木様、プレゼンテーションをお願いいたします。

【一木プレゼンター】

はい、今日はよろしく願いいたします。最初にちょっとイメージを持っていただくので、3分程度のプロジェクトの動画がありますのでご覧いただければと思います。

(動画視聴)

映像でイメージをつかんでいただいて、ご説明させていただければと思います。元々オリンピック・パラリンピックの招致活動をやってたこともあって、知事もいらっしゃいますけど、Beyond 2020 というプロジェクトがございました。2020 年以降の日本活性化、オリパラのレガシーを生かしたということですが、その時に、内閣府の認証事業で、この Beyond 2020 のネクストフォーラム、ネットワーク型でございますが、年代・業種を超えて集まろうということでプロジェクトを組みました。

私が代表をやっていたこともありまして、ここから生まれたのがこのピースコミュニケーションプロジェクトというものになります。元々ですね、今日の会議もそうなんですけれども、子どもたちが自分たちの未来をどうしたいか、そのためには何をすべきかという、それを大人がアシストしていこうということでスタートいたしました。

コロナ禍でスタートいたしましたので、まずは日本に住むお子さんとですね、外務省も最初から入っておりますので、全部の大使館に案内が行きます。日本に住む外国人のお子さんということでスタートいたしました。最近、世の中ではアルファ世代という言葉が出ておりますが、このアルファ世代に当たる日本でいうと小学校 4 年生から 6 年生が対象になっております。2021 年に立ち上げたんですけれども、その後ですね、2022 年、内閣府でこども家庭庁準備室ができて、この Beyond の流れがありましたので、こども家庭庁の方も加わりました。

そして 2022 年に、この活動の中に一緒に元国連大使の星野先生と一緒にやってるんですけど、どうせやるんだったら国連と連携しようということで、2022 年の秋に、ちょうど G7 が決まって、広島湯崎知事と一緒に、国連のニューヨーク本部に行きまして、認定を申請しました。

実は最初、こども未来国連会議という名前でやってたんですけれども、行ったらですね、この名前を使ってはいかんと。これ国連が主催してるわけじゃないんでということで。その代わりにリーガル

チェックするからちょっと待てということですね、翌年の 2 月にタイトルの認定をいただいたんですけれども、正式名称は、英文でございます。

The Children's Conference of the Future in support of the United Nations. 国連は、日本語に直すのもチェックされます。だから国連を支えるというのはちょっと大げさに聞こえるかもしれないですけど、日本語タイトルはこれでやるということで、国連を支える世界こども未来会議という名前になっております。

これがスタートいたしまして、コロナ禍がだんだん緩和されていく中で、このプロジェクトに各自治体の方から参加できないかという申し入れをいただくようになりました。一番最初にスタートしましたのが 2022 年ですね。東京都の豊島区でございます。そこから始まって、今は 10 拠点、東京都でいうと豊島区、北区、品川区、稲城市なんですけれども、今年から千代田区も参加することになりました。全国でいいますと、浜松市、県と市と混在するんですけども、大阪、広島県、愛媛県の松山市、熊本県、沖縄、豊見城市ということになっております。さらに、後ほどご説明しますが、福島県のいわき市、ここにですね、国連の CIFAL という、日本初の国連「国際研修センター」ができて、そこも連携したいということで、ここは今どんどんどんどん増えております。

一番右にあるように仕組みはどうなっているかというと、国内に関してはですね、各自治体で自分たちの街をどうしたいか、そのためには何をすべきかというのワークショップをやってですね、この中から一つの代表を選びます。

我々のプロジェクトの特徴は、もちろん審査員は首長も参加して大人がいるんですけども、子どもたちも自分たちのグループ以外は点数をつけてもらいます。大人と子どもの点数で代表を選びます。最初の頃は意外と同じだったんですけど、最近ちょっとずつですね、子どもと大人の意見が違うという現象がございまして、そういった形で開催しております。

年に一度、これは東京都と共催でやらせていただいております。東京にその全国の代表が集まります。そして、また外務省から日本に住む外国のお子さんにご案内が行きます。あと一応、内閣府も入っております、全国公募しなきゃいけないんで、そういった方々の参加によって国内総会をやります。

ここでは優劣を競いません。基本的にテーマはどうやったら平和になるか。今年は気候変動ということでやっております。そして国内代表もシャッフルします。例えば、代表の子たちが同じグループにはいません。

ここはいろんな自治体、いろんなエリアの子、いろんな国の子とですね、やりまして。そしてこれを、提言をですね、毎年ニューヨークの国連本部に持っていきます。提言を届けるとともに、研修・カリキュラムを受けてもらうというようなプロジェクトになっております。

今年はちょっと特別なパターンになっておりますが、毎年 3 月にこの国内総会みたいな形で実施しております。その代表が今年は 5 月にニューヨークの国連本部に行ってまいりました。提言を持ってですね、やってきてですね、さらにプラスしてですね、今年からの UNIS っていう、国連が経営するインターナショナルスクールがあります。100 カ国 1,400 人のお子さんがいます。ここの代表の子と、この日本から行った代表が、国連本部の中で会議をできるというのが実現できてまして。これで、一応国内から東京をフックに世界をつなげるというのが完成いたしました。

今年は、特別に大阪関西万博があるんですけども、このプロジェクトを 2019 年に立ち上げたときからですね、内閣府と経産省の方から「ぜひ万博で世界の子供たちがピースコミュニケーションを

宣言することをやってもらえないか」という要請を頂いてました。

ご存じのように今年は戦後 80 年、広島長崎被爆 80 年でございます。どうせやるんだったら、我々は 8 月 6 日から 9 日の間にやろうということで、8 月 6 日と 7 日の 2 日間でございますが、FUTURE SUMMIT 未来総会ということで、ここで特別版を開催いたします。

これは今、世界の子供たちの平和宣言を集めて、国連の幹部に渡すというような形で準備しております。そして、これは特別版でございますので、9 月からまた全国、今、今年 10 拠点で始まりまして、これをやってまた 3 月に来年 2026 年 3 月に東京都で国内総会をやって、エコシステムなんで、これを繰り返していくという形になっております。

今、キッズアンバサダー、今年は 12 名のキッズアンバサダーをニューヨーク国連本部に連れてきました。国連には Children's Corridor っていうあるんですね。これあんまり日本からほぼ子ども来ないらしいんですけど、子どもたちのためのフロアがあります。

ここでまず提言を届けて、特別カリキュラムを受けさせてもらいます。これ全部英語なんですけど、カリキュラムは子どもたちがそれぞれ、自分が大統領とか国を司る立場になって、どうやったら戦争を避けられるかみたいなカリキュラムになっています。

こちらがそしてもう一つが今年ですね、この先ほど言いました United Nations International School、UNIS という学校、100 カ国 1400 人、これ国連の職員のお子さんが大体います。だから各国に帰るとリーダーになる子が多いと言われているんですけども、この代表の子たちと日本の代表が、このセッションをできてですね、このプロジェクトが本来の意味での世界会議に到達したなと思っております。実はあの高校生、大学生の模擬国連世界会議ってあるんですけど、この世代のやつは初めてという評価を頂いてまして。国連って 193 カ国でしたっけ？あるんですけど、先進国ばかりじゃないので、これ日本のクリエイティブなイベントだなというふうにお褒めをいただきました。ということで展開しております。

さらに今年 5 月 31 日に、国連の UNITAR っていう研修機関、これの CIPAL JAPAN っていうのが、これは復興支援も兼ねてだと思んですけど、いわきに日本初の拠点ができました。

ここと一応協定を結びまして、この世界のアルファ世代のこのカリキュラムが、国連も認定するカリキュラムになるということを目指していこうということで協定を結びました。ということで、我々は、仕組みとしては今年まさに TIB という、東京都の施設でやらせていただいたんですけども、東京がですね、国内の拠点ハブになってですね、世界をつなげていくと。

まさに施設も TIB で使わせてもらったんですけど、これスタートアップのですね、TIB のコンセプトと非常に合っているんで、ぜひここもですね、国内総会は TIB で展開していければなというふうに考えております。

我々が非常に感じていることは、もちろんいろんな教育があるんですけども、日本にね、教育に足りないというより、自分たちで考えて話し合って発表する。これは、スタートアップにつながると思うんですけども、このカリキュラムが評価されまして、今、全国のいろんな首長さんからも参加の問い合わせを頂いております。

それから、残念なことであるんですけども、我々も国連にも行って 4 年目になるんですけど、非常にですね、国連内部でもすごく感じるのは、日本のプレゼンスが下がっています。GDP でドイツに抜かれただけじゃなくてですね。例えば、びっくりしたんですけども、2025 年、日本発のイベント、

我々のイベントしかありませんでした。ということもあってですね、これをなんとか未来の子供たちのために改善していきたいと思いますし、子供たちにですね、コミュニケーションの場を与えるのと同時にですね、やっぱりこの日本のプレゼンスもありますし。今僕はよく言うんですけど、野球に大谷、ゴルフに松山英樹がいるように、日本人のプレゼンスが高いはずだと。やっぱり子供たちにそういう小さい頃からですね、そういう意識を持ってもらってですね、日本を支える人材になってほしいなということで活動しております。

まさに同じことになるんですけども、やっぱり全国をつないでですね、世界都市東京が世界をつなげてですね、未来の子供たちを作っていくということ、今も国内のハブとしてご協力いただけてるんですけども。さらにですね、我々のプロジェクトの進化とともに、皆さんにもご協力いただければというふうに思っております。

最後に、皆さんのところに置いている資料がございます。2 ページから 5 ページにあるんですけども、この活動を継続的に、やっていくためにですね、我々は2022年、8月に一般財団法人を作りました。頑張って公益も目指したいんですけども、今、賛同パートナーは 140 社ぐらい集まっております。みんなが未来の子供たちのためにこのプロジェクトを推進していくということですね、参加いただいておりますし。

この財団を作るときにも国連に言われたんですけど、まず僕らも男性が多かったんですね。理事とか。日本はまずジェンダーバランスが悪いと、ここから改善しなさいということですね、いろんな女性の方に入ってもらいまして。理事は最後、前消費者庁長官の伊藤さんにも入っていただいたんですけども。こんなところからですね、海外に行くことによって、やっぱりグローバル感を感じながらですね。ただ、これは巻き込み型のいろんな方に参加していただきたいプロジェクトでございますので、今日は素晴らしい機会をいただきまして、ぜひこの機会にですね、皆さんにもまたご協力いただければと思います。

ありがとうございます。

【田中室長】

一木様、ありがとうございます。それでは、意見交換に入りたいと思います。本日のテーマである子どもが社会の一員として意見表明するための機会の創出につきまして、プレゼンテーションも踏まえて、それぞれのお立場からお話しいただければと存じます。

まず、各委員から順番にお一人三分を目安にご発言をお願いします。それでは松田委員からお願いいたします。

【松田委員】

はい、ありがとうございます。やっぱり本当に、伺っていて、まずワクワクするんですね。やっぱり子どもって、壁を越える力っていうのがすごくあって、そういうことをみんなで共有してるんだなっていう感じがすごくしました。今日はテーマになっている意見表明は、結局は子どもも何か大人もみんなっていう関係性になって、そしてみんなでつくっていくんだっていう、そういうことが始まるっていう、そのスタートということをすごく感じてました。

子どもって、僕らもやっぱり大人になっても子ども度って言いますかね、子どもの気持ちになるっていうのが、本当に壁を越えるという時にとても役に立つなっていつも思うんですけども、それって一方では何か我を忘れるっていう感じがあって。一方では自分を見失わないみたいな。やっぱり遊びの中で夢中になっている姿なんだなってすごく思いました。

そういう意味では、今日のお話もそうですし、東京都が今すごくいろんな形でやっていかれている

ことというのは、子どもって言っても、一言ではくれない、いろんな状況とか、いろんな子どもとか環境がありますから、どの子にもそういう遊びっていうものをしっかりとこうつなぐ形で、あるいはその子どもだけじゃなくて、大人も含んで、夢中になっていくっていうことを作り出しているんだって、そんな風にちょっと自分の中ではこうパラフレーズしたような感じで聞いていました。

ちょっとこのレベルがこう具体的な話になっちゃうんですけども、なんかそういう時に子どもというっていう時に、子どもが声を出してくれる時って、やっぱり子ども側からしてると壁があったりして、そんな時によくやるのが、あの握手とかなんですけど、大人がもう本当にいろんな子どもと握手をするみたいなことで、触れるっていう関係性ができた途端に、何かこう壁が取り払われて対話が進むっていうことは、具体的レベルではすごくよく経験することなので、そんなことが仕組みとしてこう作られるっていうことも必要なんだなと思いました。

ちょっと雑駁な感想なんですけれども、以上です。ありがとうございます。

【田中室長】

ありがとうございました。それでは古坂委員お願いいたします。

【古坂委員】

おはようございます。一木さんは、結構前からいろんなところでイベント等々をさせてもらって、今日の話聞いて、本当に一木さんって何者なんだ、って思いながらずっと聞いていました。いろんなことやってて、きっとこういうシステムだったりとか、取組っていうのは、やっぱり一木さんとか、東京都だったりとか、僕らはちょっとまた別ですけど、一応エンタメの部分で、大人が、子供からしてみれば勝手にやればいいのかと僕は思ってます。

まず、子供ってちょっと僕、どうしても子供が6歳、4歳なんで、未就学児の感覚になってしまうんですが、姪っ子甥っ子が大体小学校とか、自分も一応小中高は経験してるはずなので、まず子供っていうのを細かく分けていけないと。特に四歳ぐらいっていうのは月齢一週間ごとに性格が変わっていくんで、なんかこれごとにいろいろ細かいことを気にしながら聞いてみたんですけど、やっぱりこういうシステムが絶対絶対必要。大人は。で、システムを作った上で、システムがないかのように振る舞うのが一番いいなっていうふうに思いながら聞いてました。

つまり、子供たちが一番盛り上がっている時っていうのは、大人がいない子供たちだけの現場なんですよね。その時が一番意見を言ってるんですよ。そこに一人、保育園の先生が入る、小学校の先生が入る、お父さんが入る、お母さんが入ると急に意見が静かになる。で、これ何かというと、やっぱり信頼がないんだと思うんですよね。あとは安全なのは知ってるけど、安心がないっていう。

だからやっぱり今日のテーマは、子供が社会の一員として意見表明するための機会の創出なので、このシステム絶対必要。これを作れるのはもう大人しかいないので、ぜひともこれは作っていきたいということ。プラスアルファ、さあ、子供たちからどういうふうに意見を創出するのが一番いいのかなと思った上には、まずは先ほどの握手、僕-すごくよくて、ハイタッチとハグと接する時間だと思ふのですね。

この接する時間、1時間とかはもう意味がわかりません。極力言うと、2年とかの話なんですよね。やっぱり子供たちとまずたくさん接して、きっちりその人が言う「はい」は「いいえ」であるとか、この人が言う「赤」は「オレンジ」であるとかいうところまで知った上でやっと思いついて出てくると思うので。こういうきっちと一木さんたちが作ったこの大きな世界に向けて発信するシステムに次、僕らの課題はどうやって子供たちに TIKTOK みたいに頭 2 秒で興味を持たせるかというところ。まず頭 2 秒というところ。色見、デザイン、フォント、音楽、表情、動き、こういうところを子供たち用に説明していくのが僕らの順番かなというふうに思いながら聞いてました。

まずは僕が子供をリアルタイムで育児しているんで、子供たちにこういうのがあるんだよっていうのをどういうふうに柔らかくっていうのは、子供に失礼ですね。子供たちにとって興味があるように、知識の一端になれるような伝え方は何かなっていうふうに、そっち側の取り組みで、次は一本木さんとか、仲良くさせてもらったりとかしてるんで、さあどうすれば面白くできるか。きっと漢字を1文字も使わずにどうすればできるのか、とかっていうのを考えながら、そっち側に。

今日はちょっと時間は3分しかないんですけど、終わった後とかでも何か意見交換しながら具体的に動いていけばいいなっていうふうに思って聞きながら3分間終わった感じがします。はい、そんな感じです。

【田中室長】

古坂委員ありがとうございました。それでは田中委員お願いいたします。

【田中委員】

ご発表ありがとうございました。概ね古坂さんがおっしゃってくださった意見に賛同しておりまして、やはりこういったシステム化された会議体は必要であると感じています。

その一方で、私自身は7歳から18歳まで世田谷区内の児童養護施設で生活していますが、どうしてもあっち側の人だというふうに感じてしまいました。私はそっち側には行けない。そういったみんなに入るという大切さもあるけれども、みんなに入るのが難しい子もやっぱりいるっていうのを感じながら拝見しておりました。

その中で、東京都として様々なお子さんに対する意見聴取をされているのは素晴らしいことだと思っております。こちらの意見表明集のところにも、児童養護施設の子どもの声、24ページの右下らへんに書いてありますけれども、やっぱりもう入所している背景として、大人から否定されているだとか、生まれてこなければよかったとか、そういったことを言われ傷ついたお子さんたちが暮らしている場所なので、より意見を言うことへの諦めというのは非常に大きい子が多いかなという印象があります。

そういった子どもたちにアウトリーチというところで、意見を聞いているというところは非常にいいことだなと思うんですけども。逆に施設に暮らしているお子さんたちには、いろんな大人が出入りして、一回ぼっきりでいなくなる大人が多いんですよね。ご寄付もそうですし、意見聴取もそうですし。またこの人来たけど、また大人入れ替わるんだとか、そういったところでまた傷ついたり、あきらめが助長されていくというふうに感じておりますので、できれば継続して同じような一人でもいいので、継続して同じ方が何度も足を運んでくださる。そうして信頼関係を築く中で、この人なら言っていかなって思える信頼関係を築いていくことが、意見聴取という点で大切ななというふうに思っております。

そして、近年は意見表明ということで、様々な表明の機会、どの地域でも創出されていると思うのですが、やはりいきなり意見を聞かせてって言うのも難しい。それはやはり、先ほどご発表にもありましたけれども、経験を積む機会の創出。それは意見を形成するための機会だと思いますので、そういった自分が何が好きで、これはちょっとつまらないとか、そういったものを経験を通して積む中で意見が形成されて、意見を表明するって、そういった段階になると思うので、そういった意見を形成するっていうところも踏まえながら、これまで取り組んでいるような表明する機会を保障していくといいのではないかなと思います。

そして、すいません、最後ですが、先ほど古坂さんが、システム化されていない部分で子供たちは

盛り上がるということはすごく私も賛同しています。なので、だんだんと子どもたちが主体になってこども会議が開催されていく、大人が手放していく、そんな未来もあっていいのではないかと感じました。以上です。

【田中室長】

田中委員、ありがとうございました。続きまして、山本委員お願いいたします。

【山本委員】

はい。私からもですね、現場からのエピソードとかを交えながらお話できたらと思っております。私は、文京区に住んでいる中高生世代が学校が終わった後に訪れることができるユースセンターという施設の館長をしております。館長になったタイミングもですね、やはり意見表明、意見反映はすごい大事だなと思っていたので、それを軸にしっかりやっていきたいなと思ってですね、b-labを中高生のみんなと作っていききたいので、みんなからぜひいろんな声聞かせてほしいというふうなことを言ったらですね、みんなの反応がかなりイマイチだったんですよ。

皆さんがおっしゃられていたみたいに、やっぱり声が届くっていう実感がないと声は出ないよなと思っていたので、ちょっと切り替えようと思って、いろんな会話の中で出てきた声を少しずつ形にすることをしていきます。こういうものが欲しいとかでは備品を買ったりだとか、スペースの使い方とかレイアウト変更みたいなことを小さく小さくやっていったですね。そういうのを1年ぐらいかけてやっていった段階で、もしかしたらいけるかなと思って。もう一回みんなで、施設の方に、いろんな中高生からこういうものを買ってほしいとか、意見要望、提案みたいなのが表明できる仕組み自体はあったので、これ自体を今までは我々スタッフが受け取って、決めて、返すってことをやってたんですけど、これ自体を中高生のみんなと決めてやりたいんだよねって話をしてみたら、「あ、それ楽しそうだね」というリアクションに変わってきてですね。

今はその意見要望について、中高生のコアの子たちが、定期的に自分たちで話し合いの場を持って、どういうふうに扱ってほしいのかとか、場合によっては自分たちで動かしたいという風に変わっていきます。最初の方は、私の方がみんなの声、しっかり聞きたいので、司会進行を頑張ってやってたんですけど、ある中高生から「やっぱ館長がいると喋りづらいから抜けた方がいいんじゃないか」とて声も出てきて、やっぱそうか、館長というものでもなんか縦の関係性がどうしても生まれてしまうのでってところで、自分が身を引いてですね、大学生のサポートを入れながら、彼らが自分で会議を回すみたいなことをやりながら、少しずつですか、この施設を中高生が作っていくみたいなことを少しずつ実現してきています。

ちょうど先日視察に来てくれた時にですね、そのコアの子に何かやってて、やりがい何？ みたいなことを聞いてくださった時、その子が「大人がちゃんと動いてくれるってことが分かることが楽しい」みたいなことを言ってくれて、やっぱりこういう風に大人がちゃんと応えてくれるんだって感覚が伝わったのは、その土壤が少しずつできている証拠かなという風になって、ちょっと嬉しくも思っていました。

皆さんがおっしゃったみたいに、大人とかいう場所への信頼感というものもやはり大事だなと思っていますし、より多様な声をいかに聞くかというときには、日常会話とか、そういう雑談の中からいかに声を拾っていくのか、というものが大事ななと思っていて。仕組みとか非日常的な手法みたいなものも大事なんですけど、いかにそういう日常の声を拾っていく、それをいろんなところに伝えていくってところまでセットで考えられるといいかなというふうに思っていました。

あとはですね、やっぱり大人がまずは、意見表明、今までなかったものもあるので、しっかり聞くっていう構図は大事ですけど、ゆくゆくは若者が自分たちが主体となって良い社会を作るために大人

と一緒に動いていくみたいなところに切り替わっていったり、そういう社会が実現できたらいいなというふうに話を聞いていて思っていました。
以上です。

【田中室長】

山本様ありがとうございました。それでは池本様お願いします。

【池本委員】

はい。私も今皆さんのお話を伺って全く同感でして、子どもたちにこういう仕組みが本当に必要だというのは改めて思いました。また、こういう取り組みが都のレベルでも、こういう会議のレベルでもいろいろ整ってきているというのは非常にいいことだなと思っているんですけども、やっぱりそこに言えるような子どもを育てられていないって言うんですかね。

5月にユニセフの子どもの幸福度調査が出ましたが、あの中で、まず日本は子どもの自殺率が最も上昇した国って紹介と、あと、詳しくその報告書を見たところ、親と話す頻度が最も日本が低い国って、グラフで一番下、15歳の子が、親とか大人が自分の話をちゃんと聞いてくれる頻度ってのが一番低い国として紹介されていました。

私は、保育制度とか学童保育も見えますけれども、これまでその15歳の子供が育ってきた環境の政策は、結局、保育時間をいかに延ばすか、学童保育をいかに遅くまで開けるかっていう検討をやってきましたので、親と家で過ごす時間、本当にないんですね。多分、何か言おうと思っても、親がバタバタしていて多分話せないっていう中でずっと育ってくると、もう大人に話したら聞いてもらえとか、ちょっとゆったり雑談しながら、ぽっと自分の意見が形成されとか、何かそういうことが抜け落ちて、今15歳育ってきちゃったんじゃないかなって、その結果を見て思いました。

これまでは、とにかく女性が働くとか、そういうところでどんどん保育時間を伸ばしてきて、企業もそういう感じでしたけど、改めて子供たちが意見を持てたり、言えるような日常生活を作っていくためには、保育時間をもっと短くして、企業も働き方をもうちょっと柔軟にするみたいなのも考えなきゃいけない。そこが結局、意見形成とかにつながっていくのかなっていうふうに思ったところです。

あと、もう一つは、日常で話せるかということでは、家庭がまずそういう状況というのを変えなきゃいけないんですけど、保育現場とか学校の先生ですね。両方とも忙しくて、また人数もいっぱい、子供の話を、声を聞けるような先生方の状況じゃないので、家でも言えない、学校や保育園でも言えない、学童でも言えないみたいなのところが積み重なってきてしまっているなということも感じています。

学校の先生は大人数でまとめなきゃいけないから、あんまり意見も言ってもらっちゃ困るみたいなのところもありますし、そもそも、そういう子どもの意見をもっと出すとか、ユニークな意見を出す子が評価されるような学校にもまだまだなっていないなところもありますので、教育、企業の働き方とか保育時間とか、保育の先生、学校の人数の多さですね。国際的に見たらそういうところもありますので、そういったトータルな子どもの意見が言いやすいような、言いやすくするにはどうするかということで、あらゆるところを見直さなきゃいけないな、なんてことを思っていました。
以上です。

【田中室長】

池本委員ありがとうございました。本日ご欠席の秋田座長からも事前にご意見を頂いておりますので、ご紹介させていただきます。秋田座長からのメッセージです。子どもたちは、子どもならではの視点で仲間や社会、将来のことを考えています。

そうした子どもたちの本音に耳を傾けることや、本音を引き出すことが重要です。ただ、子どもたち

の中にも声を出しにくい困難な状況にある子どももいます。また、大人から声を聞いてもらう機会が少ない子どももいます。意見というと、何か完成したものをイメージしてしまいます。なのでまずは意見というより、子どもたち同士で声を上げてもらうことが大事だと考えます。子どもたちが声を上げ、それを周りが聞いてくれる。それにより、子どもたちはこの自分が受け入れてもらえると感じ、持てる能力を発揮していきます。

都では、声を上げにくい子どもたちからの意見徴収から政策提案に至るまで、様々な取り組みを進めています。ぜひ、社会のあらゆる場面で、こうした子ども参画の取り組みが広がるよう、都として働きかけを強めてほしいと考えています。

秋田先生からのメッセージでした。それでは、プレゼンテーションは皆様のご発言を受けまして、知事から何かございますでしょうか。

【小池知事】

はい。まず、一木さん、プレゼンテーションありがとうございます。そして、皆さんからどうやって子どもたちの声を聞か、そして子どもたちがその発言することが当たり前になるような、そういうプラットフォームというか、そういう空気ですかね、を作るという話を伺いました。そしてまた、一木さんの話は、国内だけにとどまらず、グローバルな場での発信ということの重要性、これは日本のあるべき姿とか、さらに大きな課題だというふうに思っております。是非、そうですね、最近はどうスマホと話したり、スマホを見ている時間の方が長いんじゃないかと思う。

まあ、そういう風潮があるのではないかな。子ども同士一緒に集まっても、それぞれがスマホを見ていたら、そこにみんなでいる意味はどれぐらいあるのかというふうに思ったりもします。ましてや、池本先生おっしゃるように、実際のところは子どもと話す時間があまり持てていないんじゃないかと。そうすると、じゃあ誰にその子どもが自分の意見を言えばいいのか。先生は忙しいという話になると、なかなかそれを言う、発言する機会がないんだろうと思いますが、できるだけ多くの子どもさんたちが自分の意見をためらうことなく表明してもらえるような、そのような視点を持ち、そのことがですね、やはり自分の考えをまとめたり、人を説得したり、そして、その他の方々にちゃんと自分の意見が伝わる様々な工夫もあるかと思うんですけれども、そのことがまた自らを育てていくということにつながる。そのような視点を持ちながら、質と量の両面からの施策を東京都でできるだけ充実させていきたいと、このように思っております。自分の考えをまとめるというのはとても大事なことですよね。ということで、いろんなご意見ありがとうございました。

【田中室長】

ありがとうございました。プレゼンターの一木様にもご発言をお願いしたいと思います。一木様お願いいたします。

【一木プレゼンター】

はい、ありがとうございます。あの、皆さんにいろんな意見をいただきまして、さっきね、古坂さんからいただいたんですけども、ちょっとお配りした資料にもあるように、我々 2000 年からですね、実はいろんな世界で活躍している人が夢あって、夢の課外授業というのを 25 年間やってまいりました。

全国 300 校ぐらい行ってるんですけども、やっぱりそういう経験を生かしてですね、今 STEAM 教育って言われてまして、やっぱりスポーツ、さっきエンターテインメント、文化とかですね、っていうのも取り入れた形にしていこうと思っています。

で、一つの例で言うと、沖縄ですね。今 1 万人規模の琉球ゴールデンキングスってバスケットチームが参加しておりまして、それから LDH JAPAN、EXILE の事務所のダンススクールも沖縄に

あつてですね、これはワークショップだけじゃなくて、実はダンス体験とバスケット体験なんかもやっています。

あとはちょっと映像にもありましたけど、MIYAVI にですね、英語なんですけど、テーマソングを作ってもらい、これも全員子供たちで歌うんですね。一応リハーサルとかするんですよ。本人厳しいからちゃんと歌ってないと注意とかしてですね。歌の中に自分になりたいこととか、これ歌詞が変わるんですね。ということもやってまいりましたので、ぜひですね、古坂さんのところにも参加いただいてますが、そういうところも取り入れていきたいなと思います。

もう一つはですね、ワークショップをやるときに必ずワンテーブルに大学生のコミュニケーションサポーターってつけます。子供たちの邪魔をしないようにリードするやつなんですけども。今、早稲田大学や大阪大学、エリアで、広島大学も参加するようになってきたんですけども、今の大学生たちって非常に賢いんですよ。なんだけど、足りないのは、やっぱりコミュニケーション能力とか人間力なんですね。彼らの社会体験になって、子供たちと話して気づきが出るんですね、僕もそうなんですけど。ハッとすることっていっぱいあります。そんなようなことで大学生の活性化になっていくんじゃないかなと思いますし、我々ネットワーク型なんで、今日委員のフォームにありますけど、私、淑徳大学の客員教授をやってまして、例えばマハヤナ学園というところのサポートもずっとやっております。というのとかですね、あの、東京都に勝山学園ってありますよね。これ 20 数年前からたまたま園長になったのが僕の友人で、そんなお手伝いとかもしたこともあるんですけども。

とにかく SDGs と一緒にですね、やれることを積み上げていくということと、古坂さんとも話したんですけど、我々の世代になってくるとですね、次は子供たちとのために何ができるかということでですね、引き続き活動していきたいと思いますので、本当に今日はいいい機会をいただきまして、皆さんとも、ご意見もいただいてですね、何かと一緒にできればなと思っております。ありがとうございます。

【田中室長】

一木様、ありがとうございました。様々な意見をいただき、本当にありがとうございました。本日の議論の振り返りをしたいと思います。

まずは松田委員からは、どの子にも子どもは壁を越える力がある。握手をすることで壁を越えていくのではないかという。古坂委員からは、大人がいない現場では声が言える、意見が言えるのに、大人が一人入る、先生が一人入ってもダメだと安心できるシステムが必要だというような話で、田中委員からは声も上げにくい子どももいて、施設では一回でなくなって諦めてしまうようなことも経験されたというお話をいただきました。

意見を言える子どもたちを作ることも大事だというお話もいただきました。山本委員からは、施設での苦労のお話の中から、小さな声を重ねることで、今では子どもたち同士でもできるようになったというようにお話をいただきました。

池本委員からは、ユニセフのお話で、日本は親と話す頻度が低いんだと。なかなか家の中でも教員、学校の中でもできないんだというような話がありました。秋田座長のお話からも、子どもたちの本音に耳を傾けることはとても重要で、社会のあらゆる場でこういうものが広がってほしいというお話。一木様もさまざまな場で取り組みをされているというお話をいただきました。ありがとうございます。皆様の意見を踏まえまして、全ての子供たちが声を出しやすいように工夫をしながら、これからも子どもたち一人一人が政策が届くようなバージョンアップを東京都としては図っていききたいというふうに思います。最後に知事より閉会のお言葉をいただければと思います。よろしく願います。

【小池知事】

はい。あの、何度も失礼いたします。一木さん、そして本日ご参加いただきました秋田先生もメッセージ寄せていただいております。

全ての子どもが誰一人取り残されことなく、将来へ希望を持つ、そして伸び伸びと健やかに育つ社会を作っていきたいと考えております。そのためには、声を上げにくい子どもたち含めて、より多くの子どもたちが社会の一員として意見表明できる機会を創出していく。

そのような工夫が重要だと考えております。自分たちの意見が尊重されて受け入れられているという、それが自信になったり、安心になったり、そして子どもたちも自分自身が社会の一部だということを感じることでありましょう。

そしてまた、当事者意識を持つということにもつながっていくというふうに思っております。中高生の交流、国際交流事業の参加者、今のような声を自らあげていただいて、取りまとめもいたしております。都として、これからの時代を担う子供たちの主体性を引き出していくということ。それから、そういう主体性の引き出しを全力で応援をしていきたいと思っております。それから握手を、という話でした。で、考えてみればね、つい数年前まで握手もダメ、お話もダメ、マスクしてっていう、そういう1,200日が続いて、で、今のちっちゃいお子さんはむしろその時代をもはや知らないわけですけども、そこから育っていった子供たちもですね、その時代、コロナ禍の時代の中であれダメ、これダメって言われてた、それをどう巻き戻して自由に発言したり、友達と触れ合ったりという、その辺のところの意識変革をね、もう一度改めて進めていく必要があるなど。

皆さんのプレゼンテーションやご意見を伺って改めて思ったところでございます。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

【田中室長】

小池知事、ありがとうございます。本日は長時間にわたりお疲れ様でした。
以上をもちまして会議を終了いたします。一木様、委員の皆様、ありがとうございます。

【小池知事】

ありがとうございます。